

食糧の食い延ばしである。ご飯を乾してカビの生えないようにしなければならぬ。

待ちに待った船がようやく来た。船はやはり貨物船を改造した大きい船であった。いよいよ乗船、出発。

玄界灘も難なく通過、日本が見えてきた。「日本だ！」。上陸は九州の鹿児島である。二月二十五日頃鹿児島に上陸した。高島屋百貨店ビルに宿泊した。長床むしろが敷いてあり、窓ガラスのないビルであった。しかし、桜島は良く見えた。

三月三日に貨物列車に乗り鹿児島駅を出発、博多駅で旅客列車に乗り換えた。窓ガラスは所々破れており、寒い列車であった。買い出しの人々がいっぱい、復員者は小さくなって乗って来た。豊橋へ到着したのは二十四時頃であった。飯田線の列車は既に無かった。豊橋駅は焼けて昔の面影もなく、側壁だけで屋根もなかった。

駅前の焼野が原を眺めながら、駅舎で居眠りをして飯田線の一番電車を待った。午前七時頃、ようやく懐かしい我が家に帰ることが出来た。

天皇陛下の御為、皇国の御為といひながら、数えて七年、満五年四ヵ月奉公してきた。出征する時は大勢の人に見送られ、帰って来る時は一人の出迎えもない。隠れて帰ってきた。本当に恥ずかかった。

百八十度の転回で金鶏勲章が悪逆非道の大罪人となった。時の内閣総理大臣東条英樹など七人が私たちの身代わりに死刑となった。

もう戦争は絶対起してはならない。豊川市民病院に精密検査のため入院して、頭部のレントゲン写真を七枚撮ってもらった。その検査の結果「額と左耳前に小銃弾ぐらいの破片がある」ことが判明した。この破片は昭和十九年七月二十一日安仁城の土産である。

死線を越えて内地送還

京都府 芦田吉雄

私は昭和十四（一九三九）年十二月一日、中支派遣岩松部隊大熊部隊大野部隊中村隊第十一中隊要員とし

て奈良第二十八連隊に入隊、十二月二十五日南京に上陸しました。直ちに南京軍官学校に入隊、一期の検閲後、早速付近の討伐戦闘に赴きました。

幹部候補生だった私は、演習、銃剣術、内務班、軽機関銃などの科目も率先垂範しました。まず先頭に立たされ、連日厳しい教科に鍛錬を受け、国家の干城として立派に軍人の本分を全うするよう教育を強いられました。

昭和十六年三月、安徽省巢県の巢湖南方作戦の戦闘で、作戦上、私たち第三大隊が正面を突破し、側面から第一大隊、第二大隊が行くという包囲作戦に出動したのですが、戦闘中、第一大隊、第二大隊との遭遇時間がずれたため、第三大隊が奥深く入り過ぎ敵に包囲された形になりました。先頭を切っていた第十一中隊の軽機関銃は撃つ間もなく、前方斜めの敵トーチカから撃つチェッコ機関銃の猛射に味方はバタバタ倒れ、その瞬間に私も左胸部貫通銃創を受け、三転して斜面に落ちました。

出血多量で意識を失っていましたが、後で聞くと、敵は一斉射撃しただけで、何かの連絡で我が援軍を知り後退し、第一、第二大隊の前に殲滅された様子でした。私の傍らにはようやく衛生兵が近寄り、三角巾を二枚患部に当ててくれましたが、それでもなお出血が多かったと。

想い起こしますと、一発左胸部に受けた時は、腹背に一握りの砂が掛ったような感触で、そこを手で払いますと血糊がべったりと付いてきました。「こりゃ、やられた」と思うと何か青い縁の布が覆って来て目が見えなくなりました。軍医が止血剤を打ってくれるのを、死を覚悟の情けの注射かと、かすかに思っただけで眠ってしまいました。心で静かに「お母さん」と聞き取れない声で呼んだのを意識しました。

ふと目を覚ました時は担架の上でした。竹を粗く編んだにわか作りの担架、二人の仔奴が担いでくれますが、道が悪いためか上下左右に揺れて、両手で担架の端を握っているのが精いっぱいでした。意識がもうろうとして痛さがわからない、だるくなり、いつし

か眠ってしまったようです。

一昼夜運ばれて、錦城寺という寺に死んだ戦友達と一緒に放り込まれましたが、間もなくその寺が敵に包囲されるところとなり、盛んに迫撃砲の炸裂する音が響きます。ドカーンと一発が命中したのでしょう、屋根にポッカーと穴が開き、薄瓦の破片が左まぶたの上を切った瞬間、気が付きました。目を力なく開けポーツとしていると、輜重兵だと聞きましたが、駆け寄って引きずり出し、再び竹の担架に乗せ逃げ出してくれました。二〇〇メートル離れたあたりの暗闇で、その寺の燃え上がるのが見え、その中にポーツと自分が死んだ火の玉が煙に乗って上がるのを見ました。脇の下から腐った膿の匂い、喉が渴いて必死の思いで手まねで水を要求するのですが誰もくれません。声が全く出ず、やっとの思いで右の腕をかみ塩気をなめて泣きました。思えば弾が当たった時「天皇陛下万歳！」も叫んでいません。ポーツとお父さん、お母さんの顔が浮かんで涙！ それも舐めつつ、だんだん思うこともだるくなってもうろうとしながら、五日後、

無湖野戦病院へたどり着くことになりました。

それから一年半、内地送還になり、転々と病院を変わり、昭和十七年四月十三日、兵役免除で我が家に帰然として帰って来ました。白衣の帰還ですが、情け無い思いが続き、同じく出征して行った戦友を思いつつ申し訳ない日を過ごしているうち、近隣の温かい情にときほぐされて、私も日本で頑張らなくてはとの思いになりましたが、何より親の思いが分かったからでした。と言いますのも私の負傷の知らせで、母が目の悪い父の手を引いて、小豆島や各地の神仏に快癒祈願に回ってくれたことを病院で聞いた時でした。

昭和十九年十二月八日、比島での弟の戦死には両親もさすがにがつくり、疲れた老いの背中を見ました。私は同年兵で戦死した藤岡障祐、中野正春、中野長太郎の三人のご冥福を祈り、墓参りに再度お参りしてご遺族の方々をお慰めし、私も励まされておりました。そして大東亜戦争が終わり、今に想えば「なぜこう

した戦争が起きたんだろう！ 日本は侵略戦争ではない！」と。当時世界に力のある国々の経済的また対外的圧迫に屈することなく、やむにやまねず立ち上がったのです。

武力には負けましたが、私は戦時中「東洋平和のためならば、なんで惜しかるこの命」と歌にうたったあの頃から、多大の犠牲を払った日本において、私自身、自信と誇りを持っております。これからは民主主義を推進して自由で明るい豊かな日本を深く深く望む者です。

南支派遣軍第十二師団

第一建築輸卒隊員

一 源潭墟にて

佐賀県 成守 宝

昭和二十（一九四五）年二月、分隊長以下我らは広東省清遠県源潭墟において、架橋工事の材料集めの命を受け、毎日深い山中に入つての松の大木伐採の作業だった。

ある日のこと、一日の作業を終え宿営地に帰る。夜になり、足を針で刺すような痛み、衛生兵は「かけ」だろうと言って毎日注射を打ってくれた。四、五日過ぎても足は大きくむくみ、しびれ、苦痛はひどく一睡も出来ない。歩行も出来なくなった。

夜が明けけるのを待ち、衛生兵や武装した戦友に見守